

『大阿弥陀経』訳注(三)

辛 嶋 静 志

は じ め に

今回訳出したのは、前回に続き阿弥陀仏の国土の様々な特徴、またそこにいる菩薩・阿羅漢の優れていることを描いた部分である（大正蔵第12巻，303c25～305c15）。底本には高麗蔵所収本を用い、『中華大蔵経』第9巻所収の金蔵広勝寺本などを参照にした。

なお、訳の部分は、1995年から1997年春まで真宗教学研究所で行われた『大阿弥陀経』研究会で、助手（当時）の竹橋太氏が下訳を準備し、私が大いに手を入れたものを参考にした。

和 訳

（大正蔵第12巻，303c25～）

¹⁾「阿弥陀仏が教授しておられる²⁾講堂・精舎³⁾はみな⁴⁾自然の七宝⁵⁾——金・銀・

-
- 1) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 225 を参照。『平等覚経』は明らかに本経を踏襲している。『無量寿経』も部分的に本経を踏襲している（271a25f.; 香川 1984: 205）。
 - 2) 所可教授 「可」はしばしば「所」と同義になり（郭 1992: 3-4; ZXYL. 315），そこから「所可」と重ねて「所」と同じ意味で使う例が仏典にはしばしば見られる（ZXYL. 315; Krsh [1998]. 436; Krsh [2001], s. v.）。本経の別の箇所にもこの表現の例がある。「是池者，皆諸菩薩，阿羅漢常所可浴池」（304b5）
 - 3) 講堂精舎 「講堂」は『後漢書』明帝紀「親御講堂，命皇太子・諸王説經」などとする。「精舎」は本来「学び舎」の意味。例えば『後漢書』党錮伝「淑少學明『五經』，遂隱居，立精舎，講授，諸生常數百人」。また，道士や仏僧が居住し，修行する所も意味する。仏典では普通，後者の意味である。しかし，本経には「阿彌陀佛所可教授講堂精舎」とあり，また前後関係から見て，いわゆる僧院（*vihāra*）という意味ではなく，具体的な建物を意味しているから，ここの「精舎」も「学舎」「講堂」の意味の可能性もある。要検討。
 - 4) 皆復 この「復」は二音節にするために加えられた接尾辞でそれ自体は意味がない。Cf. Zhu 150.
 - 5) 自然七寶 訳注(2) 注(43) を参照。

水晶・琉璃・白玉・琥珀・車渠——がすべてそろって⁶⁾できており、とてもすばらしく、明るく美しく⁷⁾、全く比べるものとしてない。(それを)造ったものとしてなく、どこから生じたのかわからない。(それを)持って来た者がいるわけでもなく、またどこかへ⁸⁾去っていくわけでもない。

阿弥陀仏の願の徳は大きく、その人は善をなしたから⁹⁾、(304 a) (阿弥陀仏が) 経を論じ、(法の) 意味を語り、教えを説き、仏道を行ずるときは¹⁰⁾、講議の聴衆¹¹⁾が、自然に現れる。

それら¹²⁾講堂・精舎にはそれぞれ¹³⁾七宝でできた高い楼と欄干¹⁴⁾がある。さらに金・銀・水晶・琉璃・白玉・琥珀・車渠でできた編み飾り¹⁵⁾が垂れ、さらに白珠・明月珠・摩尼珠¹⁶⁾を(つらねた) レース¹⁷⁾がその(高い楼と欄干)を覆っていて、(それらは) みな自ずと様々な音色¹⁸⁾を発していて、たとえようもなくすばらしい。

6) 自共 訳注(2) 注(46) を参照。

7) 明好 訳注(2) 注(9) を参照。

8) 従去 この「従」は「～から」ではなく「～へ」の意味 (cf. HD. 3. 1002b[19][3]; ZXYL. 78)。

9) 其人作善故 「其人」は法蔵菩薩をさすか。

10) 説經行道 訳注(-) 注(85) を参照。

11) 講會 竺法護訳『正法華經』の例は、Krsh (1998). 210 を参照。

12) 其講堂精舎……覆蓋其上 この部分『平等覺經』(283 b 16 f.; 香川 1984: 225) と『無量壽經』(271 a 25 f.; 香川 1984: 205) に対応がある。後者の「又講堂・精舎・宮殿・樓觀皆七寶莊嚴，自然化成。復以眞珠・明月・摩尼衆寶以爲交露 (v. l. 交絡)，覆蓋其上。」という表現は明らかに本經もしくは『平等覺經』の表現を借用している。

13) 皆復 注(4) を参照。

14) 樓觀欄楯 「樓觀」は Krsh (1998). 277, 「欄楯」は同 261-262 を参照。

15) 瓔珞 「瓔珞」とも書かれるが、これは網状の飾り物の意味。珠玉を列ねたものなので玉旁にして「瓔珞」となった。Cf. Krsh (1998). 548.

16) 白珠・明月珠・摩尼珠 「白珠」は『後漢書』などにも見える (DK. 8. 18 c)。『無量壽經』では「眞珠」に変えている (271 s 26)。「明月珠」は明月のような輝きを発する玉。夜光珠。古典から見える語。例えば『淮南子』説山訓「明月之珠出於蠃蜃」。「摩尼珠」の「摩尼」(MC. muā ni) は Skt. *mani* (宝石) の音写。

17) 交露 仏典から見える言葉。「交路」「交絡」「絞絡」「玢珞」とも書かれる。珠玉を列ねた網のこと。「羅網」と同義。Krsh (1998). 213, 216 を参照。なお、ここに対応する『平等覺經』では「交絡」とある (283 b 19)。

18) 五音聲 中国の音楽の五つの音階。すなわち宮(ド)・商(レ)・角(ミ)・徵(ソ)・羽(ラ) (Cf. HD. 1. 369. 五音)。

菩薩や阿羅漢たちの住まいもみな、七宝——金・銀・水晶・琉璃・珊瑚・琥珀・車渠・瑪瑙¹⁹⁾——がずっとあられ、(それらが)組み合わさって出来るのだ²⁰⁾。それら住まいにはそれぞれ²¹⁾七宝でできた高い楼と欄干がある。さらに金・銀・水晶・琉璃・白玉・琥珀・車渠でできた編み飾りが垂れ、さらに白珠・明月珠・摩尼珠を(つらねた)レースがその(高い楼と欄干)を覆っていて、(それらは)またみな²²⁾自ずと様々な音色を発している。

- 19) 七寶金銀……車渠碼瑙 「七寶」といいながらも、八つの宝を列挙している。本經の他の箇所に出るリストと比べると「碼瑙」が余分の様だ。しかし、本經の梵本では瑪瑙 (Skt. *aśmagarbha*) は七宝の一つとして入っていて、その替わり「琥珀」がない様だ。訳注(2)注(43)を参照。なお、「碼瑙」は「瑪瑙」「馬瑙」ともかかれるが、本經など後漢代の漢訳仏典から現れる語。梵語 *aśmagarbha* (エメラルド) は *aśman* (石, 宝石, 稲妻) と *garbha* (胎, 藏) の複合語と説明されるが (cf. MW, s. v.), 仏典以外には殆ど出ず、本当の語源は不明。西北インド方言では *aśma-* が *aśva-* あるいは *aśpa-* となり (cf. 辛嶋 1994: 37-38), それが *aśva* (馬) と理解されて、「馬瑙」などと翻訳されるに至ったのであろう。実際『法華經』のギルギット写本やコータン出土写本には *aśvagarbha* という形が見える。Cf. Krsh. 55, 290.
- 20) 轉共相成 この表現は難解。同じ表現は本經の他の箇所でも、「皆復有自然流泉・浴池, 皆與自然七寶俱生, 金・銀・水精・琉璃・琥珀・車渠轉共相成。」(304 a 12 f.); 「其池皆以七寶轉共相成」(304 b 7); 「中復有四寶共作一樹者。水精樹: 水精根・琉璃莖・金枝・銀葉・水精華・琉璃寶。琉璃樹者, 琉璃根・水精莖・金枝・銀葉・水精華・琉璃寶。是四寶樹轉共相成, 各自異行。」(305 a 14 f.); 「是六寶樹轉共相成」(305 b 1), 「是七寶樹轉共相成」(305 b 10) と出る。同じ意味を『無量壽經』では「轉共合成」で表している: 『無量壽經』「又其國土, 七寶諸樹周滿世界。金樹・銀樹・琉璃樹・頗梨樹・珊瑚樹・瑪瑙樹・車渠樹。或有二寶・三寶乃七寶轉共合成」(T 12. 270 c 5 f.); 同「黃金池者, 底白銀沙。白銀池者, 底黃金沙。…… 或二寶・三寶乃至七寶轉共合成。」(T 12. 271 b 1 f.)。
- 「轉共」「共相」(cf. Zhu 25; Krsh [1998]. 166) 「轉相」(cf. Krsh [1998]. 608) は仏典では通常「たがいに」「ともに」の意味で使われる(時に「次々と」の意味になる)。例えば、『大阿弥陀經』「其主……教衆轉相勅令, 轉共爲善, 轉相度脱。」(315 b 28 f.); 『平等覺經』「或時家中内外・知識・朋友・鄉黨・市里・愚民轉共從事, 更相利害, 爭錢財鬪, 忿怒成仇, 轉爭勝負」(T 12. 296 a 14 f.); cf. 『無量壽經』276 a 29 f.); 『離垢施女經』「辯積曰: “化其中人敢見我等, 皆得辯才, 使諸伎樂轉共談語”」(T 12. 90 a 10 f.); 『德光太子經』「共結怨害, 轉共諍鬪」(T3. 413 b 15); 『修行道地』「譬如導師將大賈人遠涉道路。…… 彼導師……知於賈人心之所念厭患涉路, 則於中道化作一國。…… 賈人大喜, 轉共議言: “一何快乎! 本謂彌久。何時脱難, 到于人間?”」(T 15. 225 c 28 f.); 『正法華經』「汝……此學不學六千比丘尼……各各展轉共相授決: “當成爲佛”」(T9. 106 b 22 f.)。また、次の例に見える「轉共相」は「たがいに」の意味である。『生經』「有大仙人, 處於閑居, 淨修爲道, 聞狐及鳥轉共相響」(T3. 89 a 25 f.); 『修行道地』「譬如二人, 一人往盲, 一人生跛, 欲詣他國。…… 盲者謂跛: “…… 今我二人轉共相依, 欲詣他國。” 跛騎盲肩, 則而發去。」(T 15. 220 a 4 f.)。
- 本經の「轉共相成」の「轉共相」はおそらく「ともに」の意味であろう。要検討。
- 21) 悉各 Krsh (1998). 481 を参照。『平等覺經』には「皆悉各」とある (283 b 22)。
- 22) 皆各 漢訳仏典から見える表現。Zhu 128; Krsh (1998). 216 を参照。

²³⁾阿弥陀仏の講堂・精舎と菩薩や阿羅漢たちの住まいの内と外のいたるところには、自然の流泉や水浴の池²⁴⁾があるが、(それらは)みな自然の七宝とともに生じ、金・銀・水晶・琉璃・琥珀・車渠が組み合わさって出来ている²⁵⁾。純金の池では、水底の砂は白銀である。純白銀の池では、水底の砂は黄金である。純水晶の池では、水底の砂は琉璃である。純琉璃の池では、水底の砂は水晶である。純珊瑚の池では、水底の砂は琥珀である。純琥珀の池では、水底の砂は珊瑚である。純車渠の池では、水底の砂は瑪瑙である。純瑪瑙の池では、水底の砂は車渠である。純白玉の池では、水底の砂は紫磨金²⁶⁾である。純紫磨金の池では、水底の砂は白玉である。

さらに二つの宝で出来ている池もあり、その水底の砂は金・銀である。さらに三つの宝で出来ている池もあり、その水底の砂は金・銀・水晶である。さらに四つの宝で出来ている池もあり、その水底の砂は金・銀・水晶・琉璃である。さらに五つの宝で出来ている池もあり、その水底の砂は金・銀・水晶・琉璃・珊瑚である。さらに六つの宝で出来ている池もあり、その水底の砂は金・銀・水晶・琉璃・珊瑚・琥珀である。さらに七宝で出来ている池もあり、その水底の砂は金・銀・水晶・琉璃・珊瑚・琥珀・車渠である。

長さ四十里の浴池もあり、長さ八十里のもの、長さ百六十里のもの、(304 b) 長さ三百二十里のもの、長さ六百四十里のもの、長さ千二百八十里のもの、長さ二千五百六十里のもの、長さ五千一百二十里のもの、長さ一万二百四十里のもの、長さ二万四百八十里のものもあった。これら池の縦横の長さは等しい。

これらの池はいずれも菩薩や阿羅漢たちがいつも水浴びするところである²⁷⁾。」

仏は語られた。

「阿弥陀仏の浴池は長さ四万八千里、幅も四万八千里あり、その池は七宝がすべて組み合わさって出来ている²⁸⁾。その水底の砂は白珠・明月珠・摩尼珠である²⁹⁾。阿弥陀仏と菩薩や阿羅漢たちのどの浴池の水も清らかで香り高い³⁰⁾。どの浴池にも香りの

23) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 204-205 を参照。

24) 流泉浴池 梵本・『無量寿如来会』・宋訳では「川」(Skt. *nadi*) とある (cf. 香川 1984: 204-205)。

25) 轉共相成 注(20) 参照。

26) 紫磨金 訳注(-) 注(81) を参照。

27) 所可浴池 注(2) を参照。

28) 轉共相成 注(20) 参照。

29) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 208-209 を参照。

30) 皆清香潔 本經の三本と『平等覺經』には「皆清淨香潔」とある。また本經の金藏には「皆清香潔淨」とある。

ある花がある。ありとあらゆる種類の花が自然に花開き、色とりどり、香りもさまざま³¹⁾。どの花と枝にも千枚の花びらがあり³²⁾、たとえようのないほどすばらしい香りだ。芳しさはいようもない。それらの花は人間世界の花でもなく、天上の花でもない。これらの花の香りは八方上下あらゆる方角にある花の香りのなかの最高のものであり、自然にすっと生じるのだ。

それらの池では水は流れており、互いに³³⁾注ぎあっている。それらの水は遅くも速くもなく流れ、様々な音色³⁴⁾を発している。」

³⁵⁾仏は語られた。

「八方上下のそれぞれの（方角の）無数の仏国の神々や人々や飛ぶ虫・這う虫などが、阿弥陀仏の国に生まれる時は、みな、七宝でできた池（に生える）蓮の花のなかにすっと生じる³⁶⁾。そのまま³⁷⁾自然に成長し、乳を飲ませて育てる者などおらず、みな自然の飲食物を食べる。身体は人間の身体でもなく、神々の身体でもない。みな沢山の善行の徳を積んで³⁸⁾、比べるもののないほどとてもすばらしい、自然で虚無なる身・極まりなき体を受けるのだ³⁹⁾。」

31) 種種異色異香 『平等覚経』には「種種異色、異香」とある。本経の二つ目の「色」は衍字かもしれない。しかし、本経の別の箇所「華極自軟好、勝於前華數千百倍、色色、異香、香不可言」(306 c 17 f.) とあるのを参照。なお、「異」は古典では「奇異なる」「めずらしい」「すぐれた」の意味であるが、漢訳仏典では「さまざまな」の意味で使われることが多い。ここでは「種種異」と同義語を重ねた表現になっている。

32) 華枝皆千葉 『平等覚経』の「華皆千葉」(284 a 4) のほうが分かりやすい。「葉」はここでは「はなびら」の意味 (cf. HD. 9. 455 b [2])。他の仏典でも、たとえば『妙法蓮華経』「是菩薩目如廣大青蓮華葉 (T9. 55 c 11)；『薩曇芬陀利経』「即時文殊師利從沙曷龍王池中涌出、坐大蓮華。華如車輪、其華千葉」(T9. 197 c 8) などの例がある。本経の「枝」は分かりにくい。『大樓炭経』の「浴池中各作七蓮華。蓮華枝有千葉。一葉上者、有一玉女舞。」(T1. 293 a 14 f.) という表現を参照。要検討。

33) 轉相 注(20) 参照。

34) 五音聲 注(18) 参照。

35) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 222 - 223 を参照。

36) 八方上下……蓮華中化生 第二願が成就した様を描いている。

37) 便 『平等覚経』は「便則」と二字に引き延ばしている。

38) 積衆善之徳 『易』坤「積善之家、必有餘慶；積不善之家、必有餘殃。ちなみに『易』のこの表現は『無量寿経』の別の箇所「積善餘慶、今得爲人、遇生王家、……」(271 c 24) と踏襲されるが、『易』では余慶を受けるのは子孫であるが、仏典では後生の自分自身に他ならない。

39) 悉受自然虚無之身無極之體 この表現は『無量寿経』で「皆受自然虚無之身無極之體」(271 c 9) と踏襲されている。他方、『平等覚経』は「悉受自然虚無之身體」(284 a 14) と短くなっている (cf. 香川 1984: 223)。「虚無」も「無極」も道家で「道」の本体を表すことば。「道」の本体は虚無であるから万物を包含することができる。例えば、『莊子』刻意篇「夫恬憺寂寞、虚無無爲、此天地之平而道德之質也；『淮南子』俶真訓「是故虚無者道之舍」。「無極」は「道」の極まりなきさまを表す。例えば、『老子』第二十八章「爲天下式、常德不忒、復歸於無極」、『莊子』在宥篇「入無窮之門、以遊無極之野」。

40) 仏は阿難に語られた。

「例えば、もし、世間にいる貧しい物乞いが帝王のかたわらに立ったなら、その人の顔や姿は、帝王の顔や姿⁴¹⁾や顔つきに似ているだろうか? ⁴²⁾」

阿難は言った。

「たとえ王子でも帝王のかたわらに立ったら、その顔や姿はとても醜く好いものではなく、帝王に百千億万倍もかなわない。なぜかという。物乞いの者は貧しく、とても疲れていて⁴³⁾、食事はいつも悪く、美味しいものを食べたことなどない⁴⁴⁾。粗末な食べ物すら十分には食べられず⁴⁵⁾、食べてもやっと命長らえる程度で、骨と関節が支えあっているという様⁴⁶⁾。自分で生活することができず、常に窮乏して、蓄えはなく、飢え、こごえ、おびえ⁴⁷⁾、苦悩している。(これは彼が)前世で人であったとき、おろかで、無知で、けちで、(304 c) 慈しみをもって善をなしたり、多くの人々を慈しんで施しをしようとしなかったために他ならない⁴⁸⁾。(彼は)大きな利益ばかり望み、飲食にけちけちし、独りで食べて美味しい味をむさぼり、施したり貸したりすれば後で良い報いがあることを信じず、また善行をなせば来世でその福德を得

40) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 226-227 を参照。

41) 形類 三本には「形状」とある。『平等覚経』には「形貌」とある。いずれも同義字を重ねた語。注(70) 参照。

42) 寧類帝王面目形類顔色不 「寧……不」は仏典や中古漢語文献に見える疑問形。Cf. Krsh (1998). 303-304.

43) 困極 「困」も「極」も「疲れる」の意味。仏典によく見える表現。例えば、『方廣大莊嚴經』「忽於道上、有一老人、氣力衰微、身體困極」(T3. 570 a 18 f.)。また、「困りはてる」の意味でも使われる。例えば、『生経』「昔者有一家、家喜行毒。…… 皆遠離之、無與從事。其人困極、遍求子婦、無肯與者」(T3. 96 b 28 f.)。

44) 常 「常」と「嘗」とは発音が同じで、書体も似ているので(いずれも略して「尚」と書かれたこともあったようだ)、しばしば混用される。

45) 能得 類義字を重ねた表現。Cf. 太田 1988: 41; Krsh (1998). 300.

46) 骨節相撐拄 三本や金藏本には「穿拄」とある(『一切経音義』も「穿拄」で引く [T. 54. 405 c9. 大正蔵の「穿拄」は「穿拄」の誤り])。漢代、陳琳『飲馬長城窟行』「君獨不見長城下、死者骸骨相撐拄」。

47) 怔忡 類似した韻の字を重ねた表現。HD. 7. 469 b には漢代『潜夫論』での出例をあげている。「征忡」とも書かれる (cf. HD. 3. 929 b)。

48) 坐 「但坐前世為人……」の「坐」(～の勢で、～によって)はここまで掛かると解釈した。

るということ信じず、ぼんくらで⁴⁹⁾、人の言うことに耳をかさず⁵⁰⁾、大いに⁵¹⁾数多くの悪行をなし、このまま命終え、財物は尽き⁵²⁾、もともと(他の人に対する)恩徳がなく、頼りになるものがなく、(三)悪道に落ちた。その報いで苦しい目にあい、その後、そこから抜け出て、今生で人間となり、賤しい者となって⁵³⁾、貧しい家の子となった。なんとか人間の形はしているが、姿はとても醜い。着ているものはボロボロ、ひとりぼっちのからっけつで⁵⁴⁾孤独、まともに体を覆っておらず、物乞いをして暮らしている。飢えと寒さに苦しみ、顔はやつれきり⁵⁵⁾、人間の様をしていない。その前世の自分の行いによって、その罰⁵⁶⁾を受けている。人々に見せても、誰も憐れまない⁵⁷⁾。町なかの道に捨てられ、丸裸で、瘦せこけ、黒く醜く、醜さ極まり、他の人の比ではない。

帝王が人間の中でとりわけ尊く、もっともすばらしいのはなぜか？(彼らは)みな前世で人であったときに、善をなし、(仏の)教え⁵⁸⁾を信じて受け入れ、人々に恩徳を施し、広く慈しみ、道義に従い、思いやりの心をもって喜んで施し、飲食を貪らず、

49) 蒙控 『平等覚経』には「蒙籠」とある。「蒙控」(méng kōng)は辞書類に採られていないが、「蒙籠」(méng lóng)、「朦朧」(méng lóng)と同様、ぼんやりとした様を示す重韻語(いずれの字も東韻)であろう。ここでは無知蒙昧で頭がぼんやりしている様を表すか。

50) 抵俚 「抵」は「こばむ」「さからう」、「俚」は「言うことを聞かない」「さからう」の意味である。「抵俚」は類義字を重ねた語。『平等覚経』には「項俚」とある(284 a 26)。これは、『一切経音義』(T. 54. 405 a 6。「項俚」と引いている)によれば、「意地っ張りで言うことをきかない」の意味。

51) 益 ここでは「ますます」ではなく「大いに」の意味。先秦代から見える用法(cf. HD. 7. 1422 b [6])。本経の他の箇所でも、同じ用法が見える。例えば、「皆是前世宿命求道時、慈心精進、益作諸善、徳重所致」(308 a 27)。

52) 盡索 同義字を重ねた表現。

53) 作於下賤 四字句にするために、本来不必要な「於」が動詞と目的語の間に置かれている。このような「於」の例は仏典に数多く見られるが(Cf. Zürcher 1987: 218; Zhu 228; Krsh [1998]. 558)、『左伝』や『史記』にも用例はある(『楊伯峻學術論文集』長沙[岳麓書社] 102-103)。「作於」で「～になる」の例は、例えば『佛本行集経』「願未來世得作於佛」(T. 3. 666 c 6); 『清淨毘尼方廣經』「寧爲菩薩、具諸煩惱。終不作於漏盡羅漢。」(T 24. 1080 a 7 f.)。

54) 單空 『平等覚経』も同じ。他に用例がない。

55) 羸劣 類義字を重ねた語。Cf. Krsh (1998). 264.

56) 殃罰 類義字を重ねた語。HD. 5. 156 b には『抱朴子』の出例が挙げられている。

57) 莫誰哀者 『平等覚経』も同じ。本経の三本などには「莫垂哀者」(憐れんで下さるものはいない)とある。「莫誰」で「誰も……しない」という意味を示す。本経でも後に「棄捐之去、莫誰隨者」(312 a 14)という例がある。

58) 経道 訳注(一)注(4)を参照。

人と分け合い、物惜しみ⁵⁹⁾せず、まったく（人と）いざこざが⁶⁰⁾なかった。これらの善根福德⁶¹⁾を積んで、命終え、その徳が付き従い⁶²⁾、(三) 悪道に生まれず⁶³⁾、今生で人間になり、王家に生まれることができた。生まれつき尊く、独り、王として（国を）治め、人民を治め⁶⁴⁾、彼らの英雄となる。顔はあくまで白く、なごやかできれいな顔、端正な身体をもち、人々に敬われ仕えられる。美味しい食べ物・きれいな服は、意のまま、望むがままに⁶⁵⁾自ずと目の前に現れる。まったく（人と）いざこざがなく、人々のあいだで目立ってすばらしい。憂いはなく、幸せで、顔は光り輝いている。だからこのようであるのだ⁶⁶⁾。」

⁶⁷⁾仏は阿難に仰った。

「おまえの言う通りだ。

帝王は、人間の中で比肩するものがないほどすばらしいのだが、もし⁶⁸⁾転輪聖

59) 遺惜 三本などと『平等覚経』により、底本の「匱惜」を改める。HD. 10. 1208 bには『宋書』に見える「遺惜」の例を挙げている。仏典にも出例は多い。例えば、『菩薩本行経』「五百長者子施立大檀，賑窮濟乏，周救一切，無所遺惜」(T. 3. 109 a 7 f.); 『菩薩投身餓虎起塔因縁経』「少小已來，常好布施，於身命財，無所遺惜」(T. 3. 424 b 25) など。他方、「匱惜」の例も少なくない。例えば、『菩薩本縁経』「我本在家，多有庫藏・象・馬・車乘・奴婢・僕使。悉以給施諸婆羅門，無所匱惜」(T. 3. 61 a 14 f.); 『大寶積経』「所重之物無所匱惜」(T. 11. 597 a 12) など。『一切経音義』「匱惜。…… 經作“匱”，筆誤，非也」(T. 54. 397 c 5) とあるように、これらの「匱」はいずれも「遺」の誤りであろう。

60) 違争 『平等覚経』(284 b 8)、『無量寿経』(271 c 22) には「違諍」とある。いずれも辞書類に採られていない表現。「違争」という書き方は、本経で、すぐ後に「美食・好衣随心恣意，若樂所欲自然在前。都無違争」(304 c 18) と出る以外は殆ど見えないが、「違諍」は仏典に出例が多い。本経でも後に「如父如子，如兄如弟，莫不仁賢，和順禮節，都無違諍」(316 b 5 f.) と出る。

61) 善福 『平等覚経』には「福德」とある(284 b 8)。「善福」は辞書類に採られていないが、仏典には多く出る。例えば、『賢愚経』「人白王言：“我坐前時勸人十善，今受此苦。…… 前人得善福耳。但教他故，獨受此苦。” 王聞歡喜答言：“但令前人得善福者，甘心受苦。不以爲恨。”」(T. 4. 364 a 14 f.)。

62) 徳随 『無量寿経』には「福應」とある(271 c 23)。

63) 不更惡道 訳注(-) 注(54) を参照。

64) 典主攬制 「典主」は類義字を重ねた語。HD. 2. 113 a に『三国志』などでの例が挙げられている。「攬制」も類義字を重ねた語。辞書類に採られていない。本経と『平等覚経』以外に竺法護訳『大哀経』に「逮得總持，攬制一切」(T. 13. 414 c 23) と出る。

65) 若樂所欲 『平等覚経』には「在樂所欲」(284 b 12) とある。意味は同じ。「在～所～」は Krsh (2001), s. v. 在 (zài) を参照。

66) 故乃爾耳 この一節の冒頭の「帝王が人間の中でとりわけ尊く、もっともすばらしいのはなぜか？」を受ける。「だから人間の中でとりわけ尊く、もっともすばらしいのだ」の意。『無量寿経』はこの表現を踏まえて「故能致此」(271 c 26) と変えている。

67) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 228-229 を参照。

68) 當令 古典に見える「當使」と同じく(HD. 7. 1392 b には『韓非子』と『墨子』の例が挙げられている)、仮設を示す。「當令」のこの用法は辞書類に採られていない。本経ではすぐ後にも「遮迦越王……當令在第二天王邊住者，其面甚醜不好」(304 c 23 f.); 「摩訶目犍連……當令在阿彌陀佛國中諸羅漢邊，其徳尚復不及，百千億萬倍」と同じ用法の例が出る。

王⁶⁹⁾のかたわらに立ったら、その面貌⁷⁰⁾はとても醜く、きれいでない。あたかも物乞いが帝王のかたわらに立ったようなものである。帝王の面貌も、転輪聖王の面貌のすばらしさにはまだ百千億万倍もかなわない。

転輪聖王は、世界でもっともすばらしく、比肩するものがないが、もし⁷¹⁾、(欲界の下から)第二番目の天の王(帝釈)のかたわらに立ったら、その顔はとても醜く、きれいでなく、帝釈の面貌の端正さ・すばらしさにはまだ百千億万倍もかなわない。

神々の王、帝釈が、もし、(欲界の下から)第六番目の天(他化自在天)の王のかたわらに立ったら、その顔はとても醜く、きれいでなく、第六天(他化自在天)の王の面貌の端正さ・すばらしさにはまだ百千億万倍もかなわない。

第六天の王が、もし、阿弥陀仏国の菩薩や阿羅漢たちのかたわらに立ったら、その顔はとても醜く、(305 a) 阿弥陀仏国の菩薩や阿羅漢たちの面貌の端正さ・すばらしさにはまだ百千億万倍もかなわない。」

仏は仰った。

「阿弥陀仏国の菩薩や阿羅漢たちの面貌は、みな端正で比肩するものがないほどすばらしく、涅槃の状態(に入った仏)に次ぐものである⁷²⁾。」

⁷³⁾「阿弥陀仏と菩薩や阿羅漢たちの講堂・精舎・住まい(の敷地)内や(その)内と外にある浴池のほとりに⁷⁴⁾、どこにも七宝でできた樹がある。

69) 遮迦越王「遮迦越」(MC. tsja kja[ka] jwpt) は Skt. *cakravartin* (転輪聖王) に対応する音写語。

70) 面形類 この「類」も「かたち、すがた」の意味 (cf. HD. 12. 353 ab[5])。すなわちこの「形類」は同義字を重ねた語(注[41] 参照。なお HD. 3. 1120 a には『孔叢子』などに見える「形類」の例を挙げ「形体類別」と解釈している)。「面形類」で「面貌」の意味。後には「面類」(304 c 25, 27, 305 a 1) と出るが、それも同じ意味。なお、『平等覺經』は本經の「面形類」・「面類」をそれぞれ「面目形貌」(284 b-9)・「面貌」(284 b-4, -2, c 3) に改めている。

71) 當令 注(68) 参照。

72) 次於泥洹之道 この表現はここ以外にも、後に「生於阿彌陀佛國，…… 壽無央數劫，不可復計數劫，恣汝隨意，皆可得之。欲食不食，恣若其意，都悉自然，皆可得之。次於泥洹之道」(313 b 16 f.) という表現が出、『無量壽經』はそれを踏襲して「後生無量壽佛國，…… 欲壽一劫，百劫，千億，萬劫，自在隨意，皆可得之。無爲自然，次於泥洹之道」(275 c 9 f.) とする。また『無量壽經』の別の箇所にも「彼佛國土清淨安隱，微妙快樂，次於無爲泥洹之道」(271 c 4 f.) という表現が見える。これらの場合の「泥洹之道」とは「涅槃への道」の意味ではなく、「涅槃の境地」の意味であろう。要検討。

73) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 192-193 を参照。

74) 所居處舎宅中内外浴池上 『平等覺經』には「所居處舎宅中，外浴池上」(284 c 7) とあり、「住まいと、外の池のほとりに」の意味になる。

純金の樹・純銀の樹・純水晶の樹・純琉璃の樹・純白玉の樹・純珊瑚の樹・純琥珀の樹・純車渠の樹があって、種類ごとにそれぞれ列をなしている。

⁷⁵⁾二つの宝で出来ている樹もある——銀の樹には、銀の根・金の幹・銀の枝・金の葉・銀の花・金の実がある。金の樹には、金の根・銀の幹・金の枝・銀の葉・金の花・銀の実がある。水晶の樹には、水晶の根・琉璃の幹・水晶の枝・琉璃の葉・水晶の花・琉璃の実がある。琉璃の樹には、琉璃の根・水晶の幹・琉璃の枝・水晶の葉・琉璃の花・水晶の実がある。これらは二つの宝で出来ている樹である。

四つの宝で出来ている樹もある——水晶の樹には、水晶の根・琉璃の幹・金の枝・銀の葉・水晶の花・琉璃の実がある。琉璃の樹には、琉璃の根・水晶の幹・金の枝・銀の葉・水晶の花・琉璃の実がある。これら四つの宝で出来ている樹は、(四宝が) 組み合わさって出来ていて⁷⁶⁾、それぞれ列をなしている。

五つの宝で出来ている樹もある——銀の樹には⁷⁷⁾、銀の根・金の幹・水晶の枝・琉璃の葉・銀の花⁷⁸⁾・金の実がある。金の樹には、金の根・銀の幹・水晶の枝・琉璃の葉・珊瑚の花・銀の実がある。水晶の樹には、水晶の根・琉璃の幹・珊瑚の枝・銀の葉・金の花・琉璃の実がある。琉璃の樹には、琉璃の根・珊瑚の幹・水晶の枝・金の葉・銀の花・珊瑚の実がある。珊瑚の樹には、珊瑚の根・琉璃の幹・水晶の枝・金の葉・銀の花・琉璃の実がある。これら五つの宝で出来ている樹が、それぞれ列をなしている。

六つの宝で出来ている樹もある——銀の樹には、銀の根・金の幹・水晶の枝・琉璃の葉・珊瑚の花・琥珀の実がある。金の樹には、金の根・銀の幹・水晶の枝・琉璃の葉・琥珀の花・珊瑚の実がある。水晶の樹には、水晶の根・琉璃の幹・珊瑚の枝・琥珀の葉・銀の花・金の実がある。琉璃の樹には、琉璃の根・珊瑚の幹・琥珀の枝・水晶の葉・金の花・(305 b) 銀の実がある。これら六つの宝で出来ている樹は、(六宝が) 組み合わさって出来ていて⁷⁹⁾、それぞれ列をなしている。

⁸⁰⁾七宝で出来ている樹もある——⁸¹⁾銀の樹には、銀の根・金の幹・水晶の枝・琉

75) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 194-195 を参照。

76) 轉共相成 注(20) 参照。

77) 銀樹 三本などと『平等覺經』に拠り、補う。

78) 銀華 『平等覺經』では「珊瑚華」になっている(284c 26)。「銀華」では、五つの宝ではなく、四つの宝で出来ていることになる。

79) 轉共相成 注(20) 参照。

80) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 196-197 を参照。

81) 七寶共作一樹 以下、本經では、梵本の *sākhā* (普通は“大枝”。しかしここでは“小枝”の意味か?) の部分が抜けていて、全部で六宝しかない。これに対して『平等覺經』の訳者は、*sākhā* を「節」と訳し、例えば「銀樹——銀根・金莖・水精節・琉璃枝・珊瑚葉・琥珀華・車渠實」(285 a 12) などと、きちんと七宝をそろえている。Cf. 香川 1984: 196-197.

璃の葉・珊瑚の花・琥珀の実がある。金の樹には、金の根・水晶の幹・琉璃の枝・珊瑚の葉・琥珀の花・銀の実がある。水晶の樹には、水晶の根・琉璃の幹・珊瑚の枝・琥珀の葉・車渠の花・白玉の実がある。珊瑚の樹には、珊瑚の根・琥珀の幹・白玉の枝・琉璃の葉・車渠の花・明月珠の実がある。琥珀の樹には、琥珀の根・白玉の幹・珊瑚の枝・琉璃の葉・水晶の花・金の実がある。白玉の樹には、白玉の根・車渠の幹・珊瑚の枝・琥珀の葉・金の花・摩尼珠⁸²⁾の実がある。これら七宝で出来ている樹は、(七宝が) 組み合わさって出来ていて⁸³⁾、それぞれ列をなしている⁸⁴⁾。

列と列が(並行して) ぴったり向かい合い、幹と幹がきちんと向かい合い⁸⁵⁾、枝と枝がぴったり向かい合い、葉と葉が向かい合い、花と花が向かい合い、実と実が向かい合っている。」

仏は仰った。

「阿弥陀仏御自身の⁸⁶⁾講堂・精舎(の敷地) 内や(その) 内と外にある七宝の浴池の周辺⁸⁷⁾にある七宝樹、および菩薩や阿羅漢たちの七宝の住まい(の敷地) 内や(その) 内と外にある七宝の浴池の周辺にある七宝樹は、数百千の列に並んでいて、すべてが⁸⁸⁾上に述べた様になっている。(それらは) みな自ずと様々な音色⁸⁹⁾を発していて、その音はたとえようもなくすばらしい。」

⁹⁰⁾ 仏は阿難に仰った。

「人間世界の帝王には百種の音楽の音色があるが、転輪聖王の音楽の(一つの) 音色⁹¹⁾のすばらしさには百千億万倍も及ばない。転輪聖王の万種の音楽の音色も(欲界

82) 摩尼珠 大正蔵本の「摩尼珠」は誤植。

83) 轉共相成 注(20) 参照。

84) 各自異行 底本には「各自異」とあるが、三本などと『平等覺經』に拠り、改める。

85) 自相准 「自相」は「たがいに」の意味。HD. 8. 1320 a, Zhu 26 にはそれぞれ『後漢書』、『経律異相』などの例が挙げられている。「准」は「準」に通じ、「ぴったり向かい合う」の意味。前後に出る「値」「准」「向」「望」「當」はみな「(ぴったり) 向かい合っている」の意。

86) 當講堂精舎 この「當」は「當人」「當家」の「當」と同じく、「自分の」の意味。Cf. ZXYL. 100 f. 『平等覺經』の訳者には分かりづらかったのか、「當」を削除している(285 a 25)。

87) 繞邊上 直後に出る「繞池邊」と同じ意味。「(浴池を) ぐるりと囲んだほり」の意味。「繞邊」は他に用例がない。「邊上」は、辞書では唐代以降の文献の用例が採られている(cf. HD. 10. 1285 a)。

88) 皆各 注(22) を参照。

89) 五音聲 注(18) 参照。

90) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 206-207 を参照。

91) 音聲 『平等覺經』のように「一音聲」とあった方がよい。

の下から) 第二番目の切利天⁹²⁾の音楽の一つの音色には百千億万倍も及ばない。切利天の万種の音楽の音色も(欲界の下から) 第六番目の天(他化自在天)の音楽の一つの音色のすばらしさには百千億万倍も及ばない。第六天の万種の音楽の音色も阿弥陀仏国の七宝樹の一つの音のすばらしさには百千億万倍も及ばない。阿弥陀仏国には、他にも万種の自然に(生じる)音楽があって、きわまりなく心地よい。」

⁹³⁾「阿弥陀仏と菩薩や阿羅漢たちは、水浴しようと思えば、それぞれの七宝池に入って水浴することができる⁹⁴⁾。菩薩や阿羅漢たちが、足を水にひたしたいと思えば、水はすぐに足をひたしてくれる。膝まで水がくればよいと思えば、水はすぐに膝までくる。腰まで水がくればよいと思えば、水はすぐに腰までくる。腋まで水がくればよいと思えば、水はすぐに腋までくる。(305 c) 首まで水がくればよいと思えば、水はすぐに首までくる。全身水につかりたいと思えば、すぐさま全身が水につかる⁹⁵⁾。水がもとにもどればよいと思えば、水はすぐさまもとにもどる。すべて思うがまま⁹⁶⁾。」

⁹⁷⁾仏は仰った。

「阿弥陀仏と菩薩・阿羅漢たちは、水浴びが終わると、みな⁹⁸⁾(それぞれ?) 一つの大蓮華の上に坐る。(すると) すぐさま四方から自然のつむじ風⁹⁹⁾が起こる。そのつむじ風はこの世界の風でもないし、天界の風でもない。八方上下(の世界)の

92) 切利天 「切利」(MC. *tāu li-*) は Skt. *trayastrīṃśa* (三十三天) の俗語形の音写。

93) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 208-209 を参照。

94) 可入……浴 『平等覺經』のように(285 b 10)「可」がない方が分かりやすい。

95) 水即自灌身上 『平等覺經』は(285 b 15)「自」がない。この場合「自」は二音節にするために加えられた接尾辞だと考えられる。訳注(-) 注(13)(30) を参照。「即自」で「すぐさま」の意。Zhu 157 は『増一阿含經』からの例を挙げている。

96) 恣若隨意所欲好喜 『無量壽經』の「自然隨意」(271 b 13), 梵本の *Sukh(F). 782. anusukham* (欲するがまま) に対応する。「恣若」(訳注(?) 注[61] を参照) と「隨意」は同義である(「隨意所〜」は Krsh [1998]. 433; Krsh [2001], s. v. を参照)。「欲好喜」は類義字を三つ重ねた表現。すぐ後に「隨意所欲喜樂」(305 c 20) という類句が出る。また『正法華經』に類似した表現がある:「隨此衆生所欲樂喜」(T. 9. 118 a 20; cf. Krsh [1998]. 562)。

97) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 230-231 を参照。

98) 悉自 訳注(-) 注(30) を参照。

99) 亂風 ここでは決まった風向きのない風のことであろう。梵本は *Sukh(F). 867. ākula-samākulā vāyavo* (乱れた風、つむじ風)。「亂風」は『長阿含經・世記經・三災品』にも繰り返し出るのが(T. 1. 139 af.), そこでは海の水を吹き上げ世界を形成する大暴風の意味である。

風のなかで最高のものがみな自然に集まってあらわれたものだ¹⁰⁰⁾。冷たくも熱くもなく、常に調和してほどよい¹⁰¹⁾。とてもさわやかで、この上なくすばらしい。ゆるやかに起こり、弱すぎも強すぎもせず、ちょうどほどよさである¹⁰²⁾。(その風が)七宝樹に吹くと、みな様々な音色をたてる。(風は)七宝樹の花でその国中をすっかり覆い、仏や菩薩・阿羅漢たちみんなの上に撒く¹⁰³⁾。花はそのまま地に落ち、厚さ四寸にもなり、とてもすばらしく¹⁰⁴⁾、たとえようもない。すぐさま自然のつむじ風がしおれた花に吹き、自ずとみな消え去る。すぐにまた、四方から自然のつむじ風が(起きて)七宝樹に吹き、樹はみなまた様々な音色をたてる。樹の花はみな自然に仏や菩薩・阿羅漢たちの上に散る。花が少ししおれて地に落ちれば、すぐさま自ずと消え去る。すぐにまた、四方からつむじ風が起きて七宝樹に吹き、(……)このように、四度くり返す。

略号表

注で使した略号は次の通り：

Coblin=W. South Coblin, *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*, Hong Kong 1983 (The Chinese University Press).

DK=諸橋轍次著『大漢和辞典』全13冊, 東京1955-60(大修館書店).

HD=漢語大詞典, 全13冊, 上海, 1986~1994(漢語大詞典出版社).

Krsh=*The Textual Study of the Chinese Versions of the Saddharma-puṇḍarikasūtra — in the Light of the Sanskrit and Tibetan Versions*, Seishi Karashima, Tokyo 1992(山喜房佛書林).

Krsh(1998)=*A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 1998, The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I).

Krsh(2001)=*A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* 妙法蓮華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 2001, The International Research Institute for Advanced

100) 都八方上下衆風中精自然合會化生耳 訳注(2) 注(51) 参照。

101) 和調中適 訳注(2) 注(57) 参照。

102) 適得中宜 この表現は他に例を見ないが、「適得其中」(ちょうどほどよい)という類似した表現が仏典にしばしば見える。例えば、『大樓炭經』「玉女者何等類耶? 不長, 不短; 不大, 不小; 不肥, 不瘦; 不白, 不黒, 適得其中」(T.1.291 b 2 f.)。「中宜」は辞書類に採られていないが、「程よさ」という意味であろう。

103) 以七寶樹華, 悉覆其國中, 皆散佛及諸菩薩阿羅漢上 『平等覺經』では「以」に相当するものがない(285 b 24 f.)。本経でも、類似した表現が後に出るが(305 c 13 f.; 307 a 27 f.), そこでも「以」がない。「以」は衍字かもしれない。そうすると「七宝樹の花はその国中をすっかり覆い、仏や菩薩・阿羅漢たちみんなの上に散る」という意味になる。

104) 極自軟好 訳注(一) 注(13) 参照。

- Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica IV).
- MC=Middle Chinese (表記方法は Coblin 1983:41 に準拠する).
- MW=Monier-Williams, M., *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford, 1899.
- Sukh(F)=*The Larger Sukhāvativyūha: Romanized Text of the Sanskrit Manuscripts from Nepal*, ed. Kotatsu Fujita, Tokyo 1992-1996 (Sankibo Press), 3 vols.
- Zhu=朱慶之『佛典與中古漢語詞彙研究』, 台北 1992 (文津出版社).
- Zürcher 1987 =許理和 (Erik Zürcher) 著, 蔣紹愚譯「最早的佛經譯文中的東漢口語成分」
『語言學論叢』14, 商務印書館 1987, pp. 197-225.
- ZXYL=董志翹・蔡鏡浩『中古虛詞語法例釋』, 長春 1994 (吉林教育出版社).
- 郭 1992 =『郭在怡語言文學論稿』杭州 1992 (浙江古籍出版社).
- 香川 1984 =香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』京都 1984 (永田文昌堂).
- 辛嶋 1994 =『「長阿含經」の原語の研究——音寫語分析を中心として——』, 東京 1994 (平河出版社).
- 太田 1988 =太田辰夫『中國語史通考』, 東京 (白帝社).
- 訳注(-)=辛嶋静志『『大阿彌陀經』訳注(-)』『佛教大学総合研究所紀要』第6号 (1999), pp. 135-150.
- 訳注(2)=辛嶋静志『『大阿彌陀經』訳注(2)』『佛教大学総合研究所紀要』第7号 (2000), pp. 95-104.